

第6回「鉄道の日」記念 フォトコンテスト

受賞作品 および
審査委員長のコメント

令和元年10月5日

第6回「鉄道の日」記念フォトコンテスト
入賞者表彰式



●記念フォトコンテストの審査を終えて

審査委員長 十文字義之

10月14日の「鉄道の日」を目途に、基幹輸送としての鉄道が多くの方々に対する認識と理解、更には親しみある鉄道の在り方をPRするため、全国の各運輸局において様々な取り組みを行っています。

国土交通省関東運輸局では、鉄道事業者で構成する「鉄道の日」関東実行委員会を組織し、PRの一環として管内における鉄道を被写体とする、「鉄道の日」記念フォトコンテストを毎年実施しています。本コンテストは、多くの方々が管内でとらえた鉄道をテーマとする写真作品を一般公募し、日夜欠かすことの出来ない鉄道輸送の親しみと認識、理解を得て頂くことはもとより、写真映像を通して新たな視点と鉄道輸送に対する再認識を得て頂くものです。その暁には、受賞作品の選考発表、表彰、公開するとともに、更なる鉄道に対する原点を見つめる一つの切っ掛けとなることを願っています。

本コンテストの審査においては、十文字義之(写真家・公益社団法人日本写真家協会会員)を審査委員長に、竹内健蔵(「鉄道の日」関東実行委員会会長・東京女子大学教授)、山口淳(「鉄道の日」関東実行委員会委員長・小田急電鉄CSR・広報部長)、原健人(原鉄道模型博物館副館長)、三村伸弥(テレビ神奈川総務局社長室長)、黒川和浩(国土交通省関東運輸局鉄道部長)を審査委員に、374点の応募作品の中から、9月13日に横浜第二合同庁舎会議室において事務局職員立会いの下、公平且つ厳正なる審査を行ったことを先ずはご報告申し上げます。

審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、審査委員賞6点、フレート賞(貨物部門)1点、テッピー賞(中学生以下部門)1点、テッピーナ賞(女性部門)1点の計14点を選考し、以下の通り受賞者を決定

致しました。最優秀賞に輝いたのは、田辺肇さんの「秋の宵」で、夕闇にヘッドライトに照らし出された箱根登山鉄道の情景をダイナミックに表現し、光の明暗を駆使した素晴らしい作品でした。それは、他の作品を寄せ付けないパワーを持つもので、審査委員一同、誰もが引き寄せられた力作でした。

今回寄せられた様々な視点でとらえられた作品群は、374点(昨年448点、一昨年291点)で、応募者数は153名(昨年159名、一昨年111名)と前回をわずかに下回ったものの昨年にも増し高質な作品が寄せられました。一方、「フレート賞」も旅客に負けない作品の重量感を表し、輸送という観点においていずれも同じ眼差しで見据えてくれたのが伺えます。また「テッピー賞」では若い視点の中に優しさが垣間見える作品が寄せられ、10代の応募者が3割近いウエイトを占めるなど、さらなる若年層の力作に期待したいところです。上位入選された作品は、いずれも甲乙付け難いものばかりであり、田辺さんの作品は審査委員を唸らせる力作であったことは言うまでもありません。

鉄道フォトコンテストという観点では、自ずと旅客輸送の視点で構成することが大半を占める一方、「輸送」「運ぶ」概念を忘れてはなりません。貨物輸送を見据えて行く中で、貨物鉄道は暮らしと産業を支える欠かすことの出来ない輸送モードであり、ライフラインの分野であると考えます。今後、撮影活動の中で旅客と貨物のモードに対して双方の眼で見据えて欲しいと願う一方、持続継続した地道な撮影活動により、次回に繋がる多くの作品を審査委員一同、期待しています。

●審査総評

応募された作品の総体は、①鉄道のシンボリックな車両そのものに焦点を置いたもの、②輸送機能としての駅空間における相貌、③路線環境(風景)と鉄道との調和、などの作画が大方で占められ、その季節感や時空間が十分表現されている。審査委員たちは、鉄道事業や映像分野に永年携わってきた方々ばかりで、言わばその道のプロである。寄せられた写真群は個々の著作者の想いが詰まっており、それは言わば自己表現であり、応募された全ての方々に賞を与えてあげたいのは、審査委員共通の思いである。その一方、コンテストという位置付けでは、作品に甲乙を付けるという作業がどれだけ辛いものか、誰もが認識している。

審査委員は、寄せられた写真群を前に、審査規定をクリアし写真映像として優れた作品である、ということとはもとより、応募者個々を一人の写真作家としてとらえ、著作権者自身が主催者に対してどのようなメッセージを送り、併せて個々の鉄道に対する眼差しや考え方、主催者の意図を十分汲み取り、審査する構えとしている。

応募者の年齢別応募数で見ると、男性は40歳代～70歳代のウエイトが最も高く72%を占める一方、女性は10歳代が多く75%となっている。とりわけ、昨年同様シニア層の写真熱が非常に高いものが同える一方、10歳代の応募者数の伸びが顕著である。デジタル化社会において、低年齢層でも誰もが簡単に写真が撮れる時代。若年層は、SNS等、写真を撮る機会を備えていることから裾野の広がりが見える。写真そのものは撮れても、それがコンテストに耐えられるかどうか、また敷居の高さがネックとなり、応募するまでに至らないという傾向があるのは事実ある。鉄道愛好の世代をみると、必ずしもシニア層で占めている訳ではなく、低年齢層から高配まで年齢層を問わないのが鉄道愛好の魅力でもある。自らとらえた写真で留まっているものと、作品として創り上げるプロセスや責任がコンテストにおいては二極化していることも確かである。

一方で、当初は少なかった低年齢層と女性作家の進出が顕著に見えてきた。蓋を開けてみると、鉄道愛好家や写真愛好家という位置付けではなく、最近写真が面白くなってきたとか、鉄道に対する知識がなくとも、車両のフォルムが可愛いとか、女性の目線でとらえられている作品が多い。これまで、男所帯であった鉄道愛好の中で、女性が新たな視点と優しい眼差しで新風を吹き込んでくれていることは喜ばしい限りである。

このような、決して写真や鉄道愛好に対するキャリアではない、作者の感性や眼差し、写真の背景にあるメッセージ性が見え隠れするものがないと、第三者(審査委員)には伝わり難いものがある。また、審査段階では、裏書は最終段階でのチェックでしか確認しない。あえて撮影データを設定しているのに見ない、というのは何故ということであるが、必ずしもタイトルやコメントが写真と一致していないことが多いからである。タイトルやコメントは示しているものの、写真はそうは言っていない、ということである。作者が現場に立ち、被写体に相対した時、これまでイメージしていた作画や思いにどれだけ近づけられるのか、が鍵となる。しかし、現実にはそうはいかないのもので、写真になると見事に覆されることも多い。想像していたものとは別の観点でとらえられる偶然性の面白さ、思い通りにならないのが、写真の真の醍醐味なのかも知れない。

●第6回「鉄道の日」記念フォトコンテスト入賞作品

最優秀賞	「秋の宵」	田辺 肇	(神奈川県横浜市)
優秀賞	「イルミネーションの駅」	古賀 清高	(埼玉県東松山市)
//	「凍てつく銀世界を駆ける」	松浦 仁	(神奈川県横浜市)
//	「夕刻後の水張り田を行く」	糸賀 一典	(千葉県柏市)
//	「祭りの夜」	伴 博之	(千葉県千葉市)

十文字義之審査委員長賞	「夕暮れのプリザード」	濱島 康郎	(群馬県みどり市)
竹内健蔵審査委員賞	「秋彩のステージ」	服部 禎仁	(東京都江戸川区)
山口淳審査委員賞	「仲良くみんなで」	山中 源三	(愛知県名古屋市)
原健人審査委員賞	「最後のご奉公」	岩田 壮一	(東京都武蔵野市)
三村伸弥審査委員賞	「Gマーク輝く」	饗庭 正志	(熊本県菊池郡)
黒川和浩審査委員賞	「小さな踏切」	小澤 宏	(神奈川県小田原市)

フレート賞	「みらいへ」	南 輝明	(神奈川県横浜市)
テッピー賞	「おさきに」	内田 修輔	(千葉県柏市)
テッピーナ賞	「検測車」	高橋 秀子	(埼玉県坂戸市)

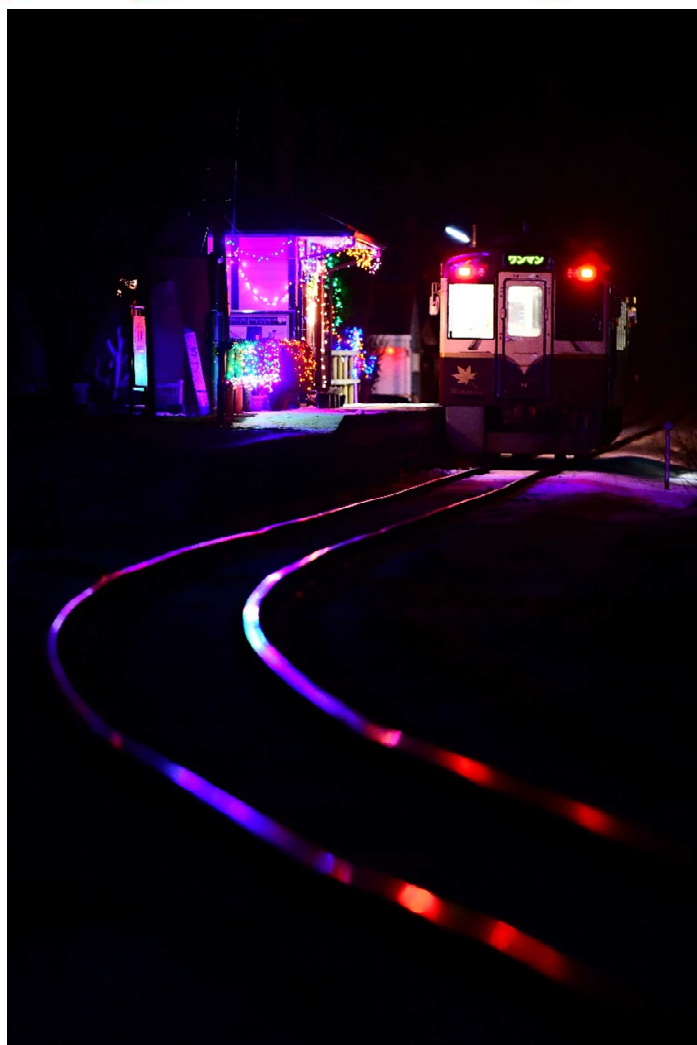
(敬称略)



最優秀賞 「秋の宵」

田辺 肇さん（神奈川県横浜市）

ヘッドライトに映し出された沿線のススキが銀色に輝き、幻想的な作画となった。色温度の調整でより一層蒼さが強調され、田辺さんの求めていた作品以上に仕上がったのではないかと。写真は想像していたものにより近づけて行く作業とは裏腹に、時として見事に期待を裏切られることがよくある。ロケーションの選定から天候、光線状態等のコンディションも日々変わって行く中、同じ写真は撮れない。だからこそ、写真にはエンドレスな楽しさがある。結果として自らの想像していた以上のものを引き出した時の感動は計り知れないものがある。迫る列車をギリギリまで引き寄せ、光軸をススキに当てた作者の技術的な高さもさることながら、レンズを通して見据えた想像以上の仕上がりを醸しだした。田辺さんの愛機に対する認識、箱根路の路線環境も熟知している総合的な判断が質の高い作品を生み出した証しと言える。



優秀賞 「イルミネーションの駅」

古賀 清高さん（埼玉県東松山市）

イルミネーションされた無人駅を背景に、軌条頭面がその光跡を繋いでいる。小さな駅も集落の玄関として位置づけられ、駅が輸送機能だけではないコミュニティの空間を醸し出しているのが安心して伺える。長めのレンズで引っ張り、背景に駅舎と佇む車両を配置したフレーミングで、より一層の安定感が表現された。夜景は露出のかけ次第で雰囲気が変わってしまう。古賀さんの写真に対する姿勢、その綿密さが作品から十分伝わってくる。夜景にありがちな多色のガラガラ感ではなく、マゼンタ基調の色彩が一層の神秘的な構内空間として表現できたことが良かった。

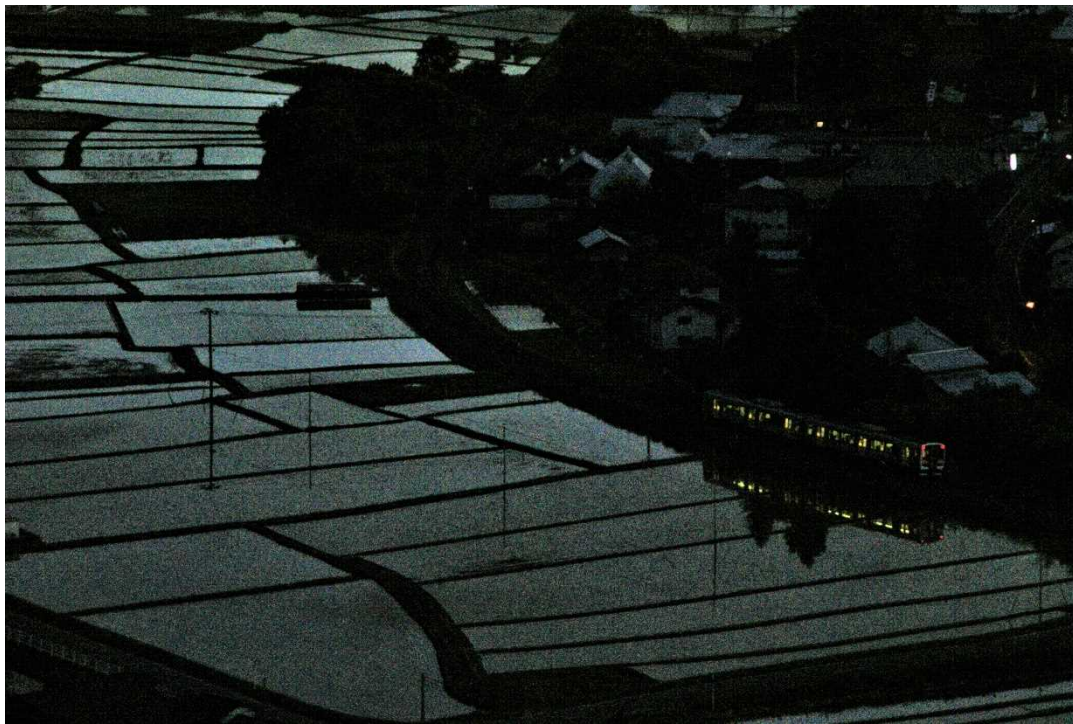


優秀賞 「凍てつく銀世界を駆ける」

松浦 仁さん（神奈川県横浜市）

今年は雪の写真が少なかった中で、松浦さんの作品は一層力強さが表現されていた。

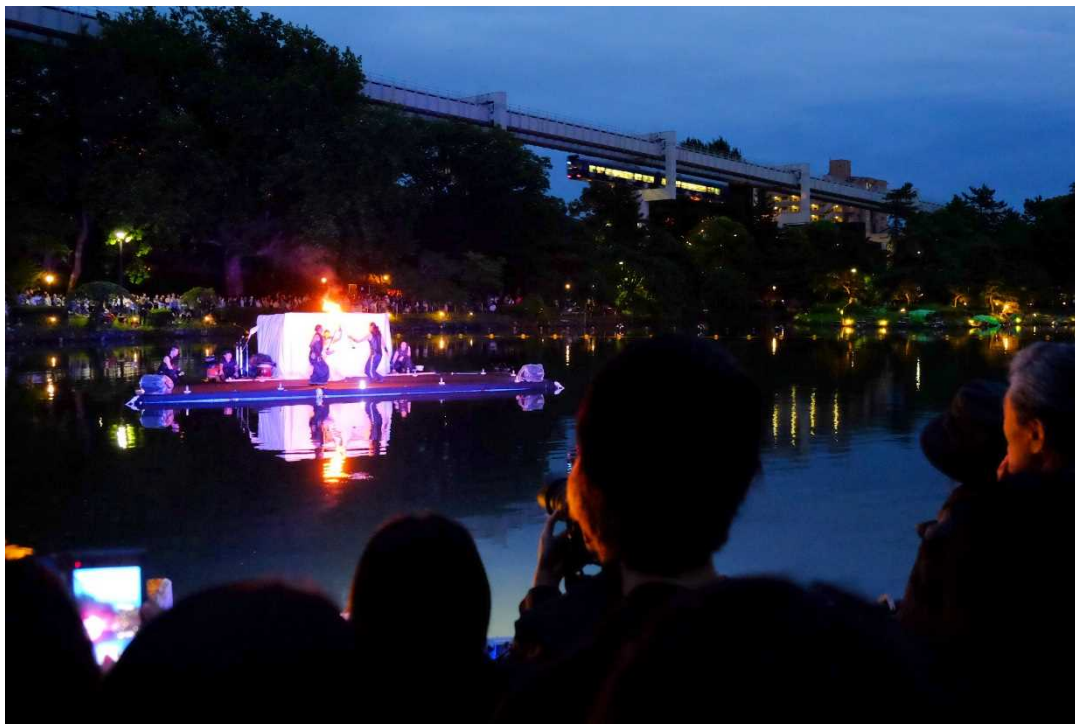
凍てつく軌道、雪煙を上げながら降雪を掻き分けていく上越線の姿にエールを送りたい。同日、水上エリアは大雪であったものの、列車は定時に走っていたという。その使命を担う鉄道の力強さを松浦さんは感じながらシャッターを切った。作画から山間部の路線環境も理解でき、架線柱に貼り付いた雪、その寒々しさも良く分かる。厳しい撮影環境に挑み、作品を仕上げた松浦さんの努力を評価したい。



優秀賞 「夕刻後の水張り田を行く」

糸賀 一典さん（千葉県柏市）

モノトーンの重量感ある作画に圧倒された。夕刻の厳しいコンディションのにも関わらず、糸賀さんの努力を評価したい。田植えを備え、満々と水を蓄えた田園を懷に、集落を横目に水郡線が街々を結ぶ。コトコトと叩音が里山に響き渡る情景が良く理解できる。そのような、写真全体から様々な想像力を掻き立てる要素が十分に凝縮した作品である。苦勞して捉えた作品には、作者のプロセスが垣間見られ、生き生きと活動する。安定した作画に見る側も安心して観賞できる作品だ。



優秀賞 「祭りの夜」

伴 博之さん（千葉県千葉市）

千葉公園で開かれた夜祭りのひと時。池の中に設置された浮舞台では、火炎パフォーマンスが披露されている。その光景は水鏡となり、観客にも照り返した。背景には流れ星の如く、千葉モノレールの光跡が流れて行く。エキゾチックな空間が異国情緒を醸し、夕闇の情景が良く表現された。標準ズームを起用した伴さんのスタンスには、あらゆる情報が詰まっていて、観る側を飽きさせない。広域レンズは使い方次第で単調になりやすい一方で、観客を大胆にシルエットにしたことで、画面全体を引き締めたところが良かった。地域と共生する公共交通の位置づけが理解できる。



十文字義之 審査委員長賞
「夕暮れのブリザード」

濱島 康郎さん（群馬県みどり市）

わたらせ渓谷鐵道の原向駅に差し込む陽は、夕暮れ時30分程度しかないという。そのような状況から考えると、列車は上下1本ずつ、ましてやその時間を通過しない限り狙うことは不可能だ。濱島さんは、現場環境と撮影プロセスを熟知している方だと思う一方、作品づくりに対する執念が伺える作品だった。遮光に照らされたブリザードと木々とのコントラストが絶妙で、長めのレンズを駆使し簡略化させた作画もいい。全ての環境が合致した結果、最良の写真が撮れたことは、チャンスを引き寄せる濱島さんの努力の他ならない。



竹内健蔵 審査委員賞
「秋彩のステージ」

服部 禎仁さん（東京都江戸川区）

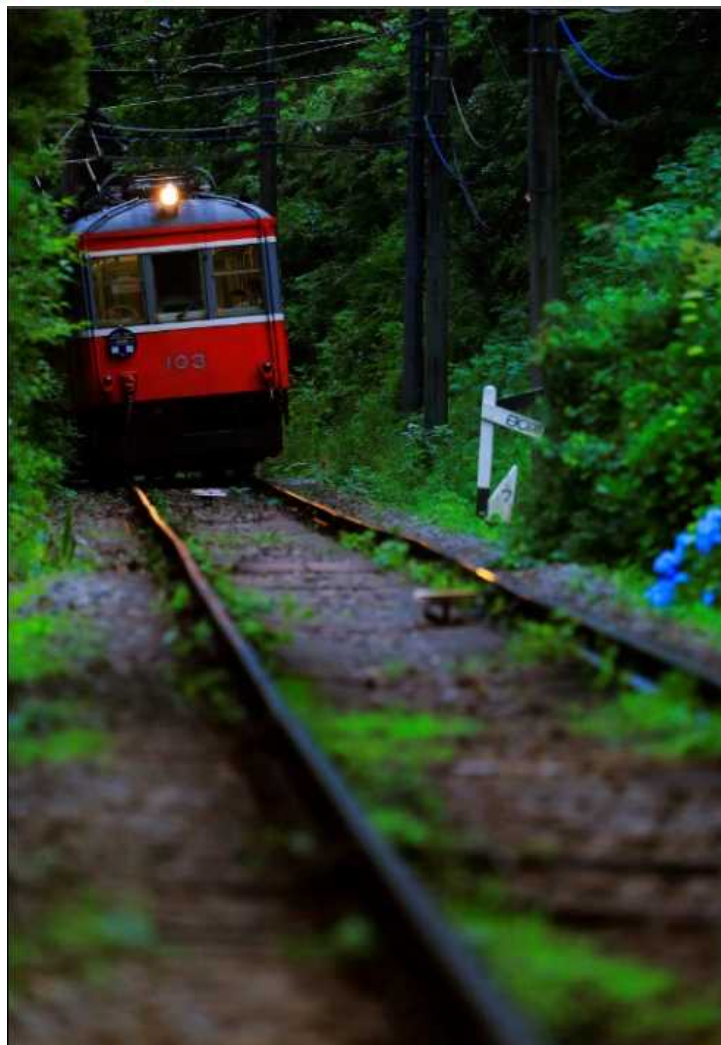
先鋭的な新幹線のフォルムとススキのコラボレーションが絶妙である。スピード感を求めてしまう新幹線とは裏腹に、自然との共生から安心させられる作品だった。遮光に映し出されたススキのフォルムも良いし、画面ギリギリまで入れたことで、車両の躍動感も表現された。横浜市内でこのロケーションに気付いた服部さんの観察力、現場を見据える力に共感してしまう作品だ。



山口淳 審査委員賞
「仲良くみんなで」

山中 源三さん（愛知県名古屋市）

散歩だろうか、保育士に誘導されながら踏切を渡る園児たち。逸れないようにロープにつかまり渡って行くオレンジ色の連隊は、何処となく「電車ごっこ」を連想させる楽しさがあった。雑草の緑とのコントラストも絶妙で、保育士の声掛けも相俟ってリズム感ある作品だ。一方で、幼児期に対する公共交通の親しみと安全の認識がよく理解できる。



原健人 審査委員賞
「最後のご奉公」

岩田 壮一さん（東京都武蔵野市）

今年は、箱根登山鉄道を捉えた作品が多く寄せられた。モハ1形103・107号車のラストランが7月だったことが後押しした。その作品群の中で一際目立っていたのが、岩田さんの作品である。開業当時から在籍した同車は、永年親しんだ箱根越えを見事に駆け抜けて行く。80パーミルの勾配を登って行くその存在感と力強さは、誰もが魅了する光景である。老体に鞭打って籍を置くも、若車には負けない気迫を感じる。その使命を全うした同車に改めて感謝の意を表したいものである。カウントダウンされた残りの日々をしっかりと足元に刻んで、後世へ引き継いだ名車が今、勇退しようとしている。



三村伸弥 審査委員賞
「Gマーク輝く」

饗庭 正志さん（熊本県菊池郡）

遮光を浴びたロマンスカーの姿を見事にとらえた饗庭さんの綿密さが十分感じ取れる作品である。グッドデザインの称号を胸に、そこに光軸を合わせたことで一層の強調性が表現された。併せて、ダークトーンの露出のかけ方が絶妙で、簡略化されたフレーミングもいい。乗客は乗っていないものの、楽しそうな個々の顔が見え隠れする。それぞれの夢を乗せて、時代に向けたロマンスカーの飛躍が感じられる作品である。



黒川和浩 審査委員賞
「小さな踏切」

小澤 宏さん（神奈川県小田原市）

楽しい写真ですね、と審査委員誰もが目を止めた。小澤さんの優しい眼差しはもとより、青い空、列車、子供たちの相貌すべてが上手くまとまっていた。一つひとつのポイントが画面にギュッと凝縮していて、観る側を飽きさせないパワーを持っていた。色彩のコントラストも良いし、警報器、遮断かんのない4種踏切の簡素感も相俟って効果的だった。子供たちの安全を確保する保育士たち、子供の顔は見えなくても列車に熱中する眼差しは分かる。公共交通の認識と理解、そして親しみや子供たちの将来性を感じた微笑ましい作品である。



フレート賞 「みらいへ」

南 輝明さん（神奈川県横浜市）

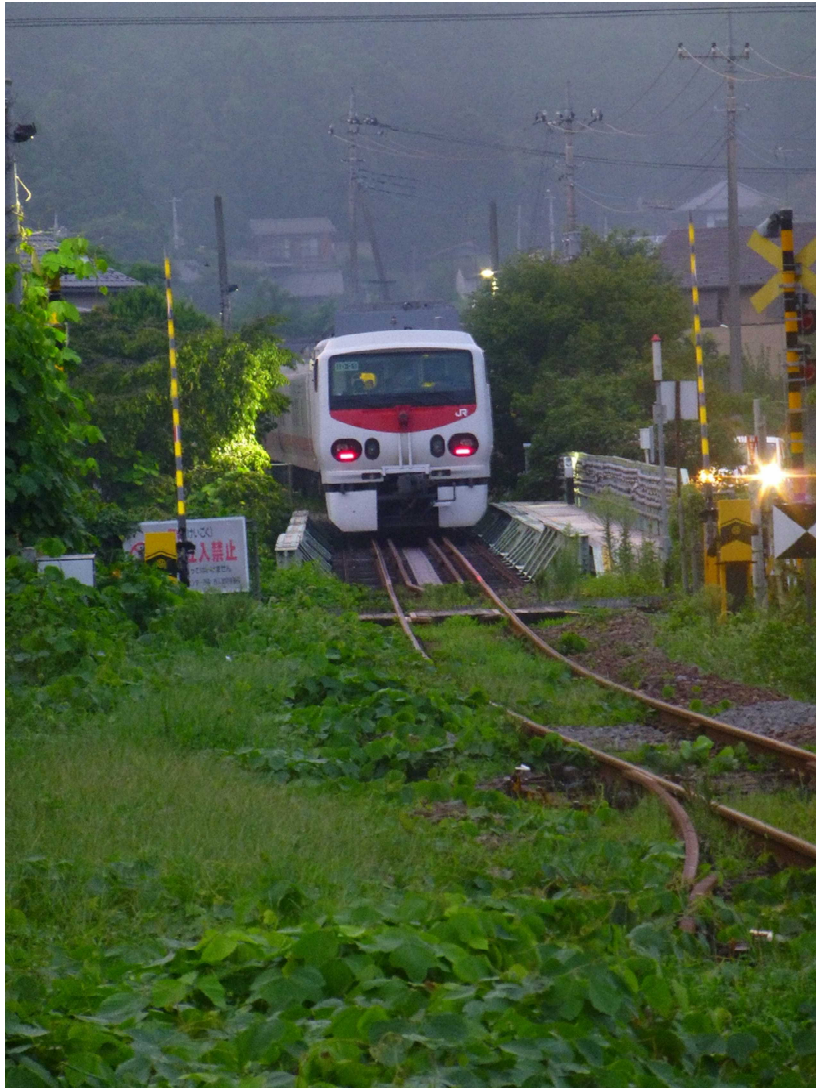
毎年、力作を寄せてくれるベテラン写真作家の南さん。今回は、みなとみらい地区に行く高島線の甲種輸送を寄せてくれた。車両工場から荷主路線に誘う貨物輸送で、オンレールで輸送される光景をとらえた。全面を覆いシークレット且つミステリーな車両と先鋭的ベイエリアの相貌が良くマッチしている。南さんの写真は、いつも落ち着きある安定した写真で、観る側に安心感を与えてくれる。甲種輸送は、ある程度年間で決まっているものの、時と場所など事前に把握して置かなければ捉えられない特殊輸送だ。南さんの写真に対する綿密なスタンスと真正面から挑む捉え方に共感する。



テッピー賞 「おさきに」

内田 修輔さん（千葉県柏市）

テッピー賞に応募される若年層の方々の大方は、車両そのものをとらえた作品で占めている中、内田さんの作品は都会の交通環境を見据えた写真だった。中目黒駅をくぐる環状線が流入する山手通りが渋滞を起こし、数珠繋ぎとなったテールライトの光跡が都市の相貌を良く表現されている。一方、中目黒駅を見ると、乗り入れた副都心線の車両が渋滞を横目に出発する姿に、鉄道の優位性を感じた。



テッピーナ賞 「検測車」

高橋 秀子さん（埼玉県坂戸市）

グリーンカーペットと化した八高線に検測車が入線した。軌道の変異等を調べる特殊車両でお客は乗れない。だから普段見ることのない車両に遭遇すると不思議な気持ちになる。その路線の安全を確保するべく、信頼感も感じられる、尾灯が表すように後追いの写真だが、現れた検測車の窓から漏れ出す室内灯がノスタルジックな夕刻の情景をよく表現している。高橋さんの写真は去年も入選し、2年連続のテッピーナ賞に輝いた。彼女の素直な視点が審査委員たちを振り向かせる要因となった。